

VI 研究について

【教員の研究活動全般について】

(1) 次の「専任教員の研究実績表」の例示を参考にして過去3ヶ年の専任教員の研究状況を記載し、その成果について記述して下さい。

学 科	氏 名	職名	研究業績					国際的活 動の有無	社会的活 動の有無	備考
			著書・製作数	論文数	学会等発表数	作品発表	その他			
幼 児 教 育 学 科	青山 幸司	教授				45	36	有	有	
	朝倉 喜裕	教授				16		無	有	
	五十嵐峰子	講師		3				無	有	
	和泉美智枝	教授		3	2			無	有	
	岩本 静香	教授		2				無	有	
	遠藤伊津子	講師				1	2	無	有	
	加藤 晃	教授						無	有	
	ガート・ウェスタハート	助教授				2	8	有	有	
	佐々木賢二	講師		7			13	有	有	
	佐々木弘明	教授		1				無	有	
	吉 惣一良	教授						無	有	
	中村 明成	助教授		3				無	有	
	野田 哲郎	助教授		2	1			無	有	
	林 良征	教授						無	有	
	舞谷 邦代	講師		3	1			無	有	
	水上 和子	講師				5		無	有	
	美 術 学 科	森田ゆかり	講師		3	1	8		有	有
山根 淳子		助教授		3	3			無	有	
米川 祥子		講師		2			1	無	有	
新井 浩		講師				30		無	有	
黒川 威人		教授	2	3	2	3	1	有	有	
権田 宜子		助教授				11		無	有	
高野 実		教授				46		無	有	
東田 修一		教授				20		有	有	
中山 治男		教授		1		12		有	有	
丹羽 俊夫		教授	3		15	2512		有	有	
林 可耕	教授		1		15		無	有		
堀 一浩	助教授			1	18		無	有		
和田 鉦樹	助手				1		無	無		

学 科	氏 名	職名	研究業績					国際的活 動の有無	社会的活 動の有無	備考
			著書・製作数	論文数	学会等発表数	作品発表	その他			
ビ ジ ネ ス 実 務 学 科	新井 一男	教授						無	無	
	井戸 健敬	講師		8	13			有	無	
	井上 克洋	講師	1	3	1			有	無	
	大屋 恵子	助教授		3				無	無	
	岡野 絹枝	教授	4	4	4			無	有	
	加藤 恒	教授						無	有	
	加藤 博	講師		5	1		2	無	有	
	北川 昭栄	教授		2				有	有	
	下口 治美	助手		2				無	有	
	瀬戸 就一	助教授		9	11			有	有	
	中谷 重之	教授						無	有	
	能 雄司	助教授		6	2			無	有	
	廣瀬 元	助教授			1			無	有	
	藤元 宏一	教授			1			無	有	
	矢澤 建明	助教授		6	5			有	有	
若月 博延	講師		1	2		1	有	有		

註) 研究業績数は本人の自己申告による。 ◇参考資料No.4「教員個人調書」

(2) 教員個人の研究活動の状況を公開していれば、その取組みの概要を記述し、公開している印刷物等を訪問調査の際にご準備下さい。

教員個人の研究活動の状況は特に公開していません。

(3) 過去3ケ年の科研費の申請・採択等、外部からの研究資金の調達状況を一覧表にして下さい。

過去3か年の科学研究費補助金の申請等の状況については、平成15年度、16年度とも申請は無く、平成17年度に2件の申請を行ったものの採択されなかった。また、外部からの研究資金の調達は過去3年間はない。

(4) 学科等ごとのグループ研究や共同研究、当該短期大学もしくは当該学科等の教育に係る研究の状況について記述して下さい。

〔幼児教育学科〕

過去数年間、学科内の日常教育活動の整備や確認にエネルギーを取られてきたが、本学科もようやく周囲や前方を見ての教育活動の準備期に入ってきた。

(1) 子育て支援研究センターの立ち上げ

年5～6回の地域社会の行政職員，保育士，幼稚園教諭，一般主婦，本学科の教員数人の研究会と，2回目のフォーラムの開催（平成16年度第1回の参加者146名，平成17年度150名）

(2) 特化科目の新設

保育士として，社会の要請に応え，専門性を高める新たな試みとして，学生の希望を入れて，音楽表現指導法，美術表現指導法，障害児保育演習，乳児保育演習に学生を分け，特化演習をさせる。

(3) SLOsの試み

2年間で教員への意識の変革を学生に求めながら，今日までその確認や学生の生活の軌道修正の組織的な教育施策を持たなかった。学生と教員が一緒に歩いて達成度を点検する，平成18年度スタートのこの企画の定着，発展を望みたい。

◇参考資料No.3「短大だよりNo.40」p.6

【美術学科】

現在のところ，美術学科として特別のグループ研究や共同研究の取り組みはなされていないが，コースごとに兼任講師も交えて，実技・演習の課題や評価について日々意見交換がなされている。また，卒業制作展，白山美術館の活用，地域貢献事業，ファッションショーなど学科全体で行う事業が，実質的に共同研究の性格をもって実行されている。

◇参考資料No.3「短大だよりNo.40」pp.7-8

【ビジネス実務学科】

ビジネス実務学科では，「特色ある大学教育支援プログラム」の進展に合わせて，学科内教員グループによる研究が盛んになってきたと考えている。

その一つが，16年度から取組開始した「特色GPプロジェクトチーム」の活動である。毎月1回以上のプロジェクト会議を開き，7名の若手を中心にした教員のチームが，学内におけるキャリア教育支援事業，卒業生・地域に対するキャリア教育を2本の柱にして，チームの各担当者が分野・領域ごとに研究実践を行ってきた。この2年間の研究・実践成果を報告書にまとめて発刊する予定である。

また，学年全体で取り組む「基礎教養」，「企業研究Ⅰ・Ⅱ」についても，毎年グループ担当者を中心に内容を研究・工夫し，授業に活かしている。したがって，学生の授業への期待・評価は高い。事前準備，事後の評価点検に時間はかかるが，改善，新しいアイデアを取り入れ，ビジネス実務学科の看板授業に育てていきたいと考えている。

◇参考資料No.12「キャンパス内におけるキャリア教育～意識変容への挑戦～」

【研究のための条件について】

(1) 研究費（研究旅費を含む）についての支給規程等（年間の支出限度額等が記載されているもの）を整備していれば訪問調査時に拝見します。なお規程等を整備していない場合は，過去3ケ年の決算書から研究に係る経費を項目（研究費，研究旅費，研究に係る施設，機器・備品等の整備費，研究に係る図書費等）ごとに抽出し一覧表にして下さい。

規程がありますので，訪問調査時にご確認ください。 ◇参考資料No.25「研究費使用規程」

(2) 教員の研究成果を発表する機会（学内発表，研究紀要・論文集の発行等）の確保について，その概要を説明して下さい。なお過去3ヶ年の研究紀要・論文集を訪問調査の際に拝見しますのでご準備下さい。

教員の研究活動には，授業に関する研究と専門分野の研究が考えられるが，授業に関する研究については各学科で独自に展開されている。学内発表の機会は定期的なものはないが，学科や教員からの発表申請があれば検討し対応する。17年度では，ビジネス実務学科の「特色ある大学教育支援プログラム」採択発表会が全教員対象に行われた。

また，専門分野の研究（授業に関する研究も含む）の発表の機会は，毎年度末に発刊される「金城紀要」があり，「研究費使用規程」で紀要研究費10万円の枠が用意されている。美術学科では，各種展覧会への出品や個展などの作家活動や各種展覧会の審査等，本業と深く関係した研究活動がなされている。ビジネス実務学科，幼児教育学科では各種学会，研究会での発表，また研修会や大学院での研究等，研究機会の確保が保証されている。

(3) 教員の研究に係る機器，備品，図書等の整備状況について，前年度の決算よりその支出状況を記述して下さい。また訪問調査の際の校舎等案内時に教員の研究に係る機器，備品，図書等の状況を説明して下さい。

平成17年度の決算による，教員の研究に係る機器，備品，図書についての支出額は，約740,000円となっている。

(4) 教員の教員室，研究室または研修室，実験室等の状況を記述して下さい。なお訪問調査の際に研究室等をご案内願います。

専任教員には，研究室が与えられている。非常勤講師には共同の講師控室がある。

(5) 教員の研修日等，研究時間の確保の状況について記述して下さい。

教員の研修日は火曜日の午後ということになっているが，会議もこの曜日に集中しているため，火曜日の午後に研修日に充てられない教員は多い。学生のいる間は，学生への対応や校務に追われがちで，個人の研修時間が取れるのは平日の午後5時以後となる。

【特記事項について】

(1) この《VI研究》の領域で示した評価項目や評価の観点の他に，教員の研究について努力していることがあれば記述して下さい。

教員の研修のため，大学院での研究，博士号の取得のための研究，海外研修や論文発表，講習会への参加等，必要と判断された時は，適宜研修機会が与えられてきた。